

ニッポン全国元気団紹介 山口県連盟 岩国第1団

スカウト活動の精神を大切に、指導者と保護者で未来へ繋ぐ

山口県岩国市は広島県・島根県との県境に接しており、山口県最東部に位置する市。錦帯橋や岩国城など歴史的建造物や史跡が多く、四季を通じて楽しめる吉香公園・紅葉谷公園・寂地峡など自然と触れ合える場所も多い。また錦帯橋祭りや米軍基地航空イベントなど他県からの観光客も集めている。

岩国第1団は昭和22年、本部としている岩国市本能寺の住職(小島孝惇氏)により設立。県内では最も長い歴史があり、山口県で最初に結成されたボーイスカウトの組織となっている。野外活動から自然を学び、自主性・協調性を育み、社会で活躍できることを目的としている。活動地域は岩国市内および周辺地域で、他市町の団と交流することもあるようだ。



少子化や余暇活動の多様化により日本のボーイスカウト全体の人口は減りつつあるが、岩国第1団はそんな社会的背景にも関わらず隊員数が増えている。ベンチャーやローバーは横ばいの数字にはなっているが、ビーバー、カブの増え方は明確だ。

BVS 平成25年3名→令和4年13名

CV 平成25年11名→令和4年16名

■露出を増やすための工夫

岩国第1団では日々の活動の中にちょっとした「仕掛け」を入れている。例えば野外活動に出かける時は、目的地よりも2～3キロ手前から歩いて行く。そうすることで道中の自然を楽しむことができ、街ゆく人への宣伝にもなる。



もう1つは目立つ場所での活動。例えば錦帯橋祭りでの奉仕活動だったり、岩国祭りで手作りのお神輿を担いでみたり、人が集まる場所でアピールし露出を増やすことで「何やってるのかな？」と興味を持ってもらえる。パンフレットやホームページなども宣伝には効果的だが、岩国第1団は実際に目で見てもらうことを大切にしているようだ。

アピールする場所や方法は常に同じではなく、8割は変えず、2割は新鮮さを取り入れながら変えている。こうした地道な活動と変化に対応する組織という特色が隊増加に繋がっているのかも知れない。

■ 団員数が増えた大きな要因

露出を増やす活動に加えて、最も大きいのがスカウト活動に共感した「保護者のロコミ」によるものが大きい。ビーバー隊では保護者参加型の集会を行ったり、「クラブとボーイスカウトの両立が難しい」など相談内容は様々だが、保護者の方との個別相談にも応じている。カブ隊ではプログラムを保護者の意向を踏まえて実施、また組集会を月1回ほど実施している。保護者がキャンプの計画や調理を立案することもあるという。



このように岩国第1団は保護者とのコミュニケーションを最も大切にしている。特にビーバー、カブは保護者と一緒に参加するので、みんなを上手に巻き込み、一体となって活動している。実際に岩国第1団ではホームページからの問い合わせもあるが、ロコミによって増えたケースがほとんどになっている。取材日にも見学する2組の家族がいたが、どちらも友人・知人からの紹介によるものだった。



■ 保護者やスカウトから指導者へ

多くの団は指導者獲得に困っているものの、岩国第1団はベテランから若手まで揃っている。「活動のお手伝いをしていて自然になった」というスカウトから指導者になるケースもあれば、「自分の子どもがお世話になってるから恩返ししたい」という保護者から指導者になるケースもあるようだ。

見学してる保護者の方へ「一緒に手伝っていただけませんか？」などと声をかけたり、指導者も積極的だ。その成果か岩国第1団の指導者は多くいる。一人一人の負担が少なく、指導者として無理のない活動ができるという点も大きい。隊員数51名に対して指導者が25名(令和4年現在)当日に参加される保護者を入れると賑やかな大所帯だ。ベテランの指導者が見守る中、若手指導者とベンチャーやローバーが子ども達や保護者と話しなが生き生きと楽しそうに活動している姿が印象的だった。



現在はコロナ禍で活動が縮小されている部分もあるが、米海兵隊岩国航空基地内のアメリカスカウトとの交流など、国際的な交流もある。互いの知らない文化や言語、考え方の違いなどの相互理解、グローバルな視点から「健全な青少年育成」に力を入れている。